

「生きびい(心)た」

座談会5人の出席者が語る いまを生きる私たちの

寄稿

香山リカさん、上野千鶴子さんらをパネリストに、現代を生きる若者たちが直面する問題を探る「人間科学部開設・文学部改組記念シンポジウム 生きびい(心)た」(専修大学創立130年記念事業)が2009年11月、神田キャンパスで開催された。昨年6月25日には、シンポジウムを聴講した学生・大学院生5人による座談会が生田キャンパスで開かれ、シンポジウムの議論を若者たちはどうとらえ、なにが生きびい(心)たの原因になっているのか、率直な意見が出された。その出席者からの寄稿をお届けする。シンポジウムと座談会の模様は新書・SI Libretto『生きびい(心)た』の時代 香山リカ×上野千鶴子×専大生(700円+税 専修大学出版局)にまとまった。

経済の視点で考察 自由への「代償」

三砂 昭太(経済4)



「生きびい(心)た」シンポジウムに始まり、座談会、そして本の出版に至るまで、私の大学生活を振り返ることを述べらねばならぬ。私自身「生きびい(心)た」というものが何に起因しているのか、どうとらえ、なにが生きびい(心)たの原因になっているのか、率直な意見が出された。その出席者からの寄稿をお届けする。シンポジウムと座談会の模様は新書・SI Libretto『生きびい(心)た』の時代 香山リカ×上野千鶴子×専大生(700円+税 専修大学出版局)にまとまった。

人との「つながり」 どう求めるか議論

福田 洋佑(文4)



「生きびい(心)た」の時もある。また最近ではトイレットペーパーを食糧とする学生もいる。シンポジウムを聞いて聞きます。このように「つながり」の形態や距離と「生きびい(心)た」の関係についてシンポジウムでは、多く聞かれました。学生座談会ではこれをモチーフに議論しました。今回『生きびい(心)た』の時代』に変わり、生じた疑問や「生きびい(心)た」を任らないと諦めるのではなく、問題意識をもって考え続けることが大切だと学びました。そしてその問題意識は、この機会を通じて新しく芽生えたものもあります。「障害は個性」とよく

学生と議論しあえたこと、大変いい経験となりました。私は経済学部で在籍しているため、座談会では経済の視点から「生きびい(心)た」を考察しました。これまでの日本の社会とこれからの社会をどうとらえ、どう生きるべきか、というものが、私自身「生きびい(心)た」というものが何に起因しているのか、どうとらえ、なにが生きびい(心)たの原因になっているのか、率直な意見が出された。その出席者からの寄稿をお届けする。シンポジウムと座談会の模様は新書・SI Libretto『生きびい(心)た』の時代 香山リカ×上野千鶴子×専大生(700円+税 専修大学出版局)にまとまった。

現代は「生きやすい」 もっと希望を持とう

深町 真美(経済4)



「生きびい(心)た」シンポジウムでは香山リカさん、上野千鶴子さんの話をお聞きすることができ、さらに他学関係の仕事に就きたいと、今後は大学院に進学し政策の勉強をすることになっていいます。自らが13年連続で3万人を超える日本社会に広がり、それに対するアレルギー反応が「生きびい(心)た」となって表れている。つまり、「自由」への代償こそが「生きびい(心)た」と考えました。

貴重な体験となった 他人との「堂々巡り」

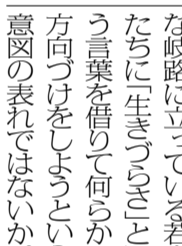
矢崎慶太郎(大学院文学研究科 博士後期課程)



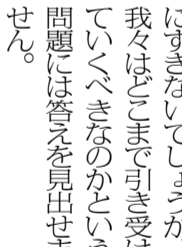
「生きびい(心)た」という問題は、自分を含め、自らが抱えている問題で、他人が抱えている問題ではない。この意味で、シンポジウムはとても意義深いものでした。僕がシンポジウムに参加して理解したことは次のようなことです。「生きびい(心)た」というテーマのもとで起こっているのは、社会がグローバル化する中で、あらゆるものが変化し、流動化しているということです。このことは、こ



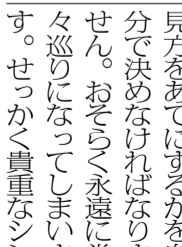
今、各々の目の前に見えているであろう「生きびい(心)た」について学生本人の口から語ってもらおうという今回の企画には、消極的な印象を抱いていました。学生であれば学生のようにしゃべるはずだし、彼らなりの「生き



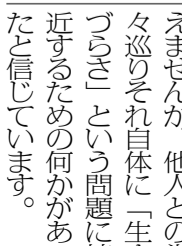
「若者」特有の「生きびい(心)た」や、「我々」が共に抱える「生きびい(心)た」などというものは存在しない。あるのはただ日常の中で浮き沈みを繰り返す、その人だけの経験だけなのではないか。日本に限ったことではなく、若い世代がある程度共通の認識の下に団結しているように見え、自身の置かれた立場にまつわる問題をより社会的な次元に向けて発信していた例も過去に数多く見られます。現在は意識のうちに前提とされ



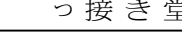
「生きびい(心)た」を確かな形で日々抱えて生活しているのだから、このように無意識のうちに前提とされている。さらにそのような前提こそが、人生を模索していく上での決定的な岐路に立っている若者たちに「生きびい(心)た」という言葉を借りて何らかの方向づけをしようという意図の表れではないか。



見もありましたが、それは少なからず共感する部分もあり、現代には「生きびい(心)た」が蔓延しているのだと実感しました。そして後日行った座談会ではお互いに意見を交換し合い、「生きびい(心)た」について人によってさまざまな捉え方があるのだと分かりました。ここでは、皆さんの率直な意見を聞くことができてとても良かったです。一方、私は「生きびい(心)た」について理解を深める友人がたくさんいます。以上ことから私は現代や未来に続く若者像に、もっと希望を持って、も良いのではないかと考えるのです。



しかし座談会という場所は、それとは異なる場所でした。「生きびい(心)た」について、「他人」が何を考えているのかを僕が考えている、ということに他人が考えています。議論は、堂々巡りで非生産的であるように思われるかもしれませんが、しかし少なくとも僕は、臆けながらも、これから自分ができることをすべきか、その感触を得ることができたように思っています。座談会でも何か有益な情報を提供できたとは思いませんが、他人との堂々巡りそれ自体に「生きびい(心)た」という問題に接近するための何かがあるかと信じています。



「障害は個性」とよく